

マタイの福音書 6章 チャック・スミス

テープ #C2178

マタイの福音書第6章を見て行きましょう。私たちは今、マタイの福音書の中の、山上の垂訓と一般に呼ばれている部分を学んでいます。山上の垂訓と呼ばれるのは、それが、イエスの弟子たちに語られたのが、ガリラヤ湖を望む山腹であったからです。

「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」 (5:1-2)

私たちが最初に注目するのは、この山上の垂訓が、世間一般に向けられたものではないということです。それは世が採り入れるべき法体系といったようなものではないし、採り入れることのできるものでもありません。

山上の垂訓はイエス・キリストの弟子たちに向けられたもので、その教えの始めの部分で描写されている人たちだけが、本当に実践することのできるものであり、それも、聖霊の力によってのみ、可能なものです。

そこでまず初めに、イエスが取り扱われている人物の描写がありますが、その描写は、イエスはその教えの対象となる人を描く際に、八福の教えという形をとっています。**「心の貧しい者は幸いです。悲しむ者は幸いです。柔和な者は幸いです。義に飢え渴いている者は幸いです。あわれみ深い者は幸いです。心のきよい者は幸いです。平和をつくる者は幸いです。」 (5:3-9)**

こういう人たちが神の子どもです。こういう人たちがイエス・キリストの弟子です。これらが、イエス・キリストの弟子の特質なのです。

そしてイエスは、彼らに対する世の反応がどのようなものであるかを告げられます。彼らは迫害されます。世は彼らを理解せず、彼らをののしり、ありもしないことで様々な悪口を言います。

けれど、世に罵られると、彼らは喜び、喜びおどるのです。それから、イエスは、彼らが地に与えるべき影響のことを語られます。「あなたがたは塩、つまり、不道德な社会における保存効力です。

あなたがたは暗やみの中の光です。あなたがたは世界の光です。あなたがたは地の塩です。」

それからイエスは、戒めに関して、また、戒めと信じる者との関わりに関して彼らに語り始めますが、それは確実に弟子たちの一人ひとりを驚かせ、当惑させるものでした。そしてイエスは、ご自分が来られたのは律法を廃棄するためではなく、それを成就するためだと告げられます。

それからイエスは、あの度肝を抜くような発言をされました。**「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。」 (5:20)**

律法学者やパリサイ人たちは、律法の細かい部分まですべて守ることに、全人生を費やしていました。よって、イエスにこのようなことを言われたら、私だったら即座に先ず、投げ出したくなったことでしょう。

「じゃあ、もういいや。もうたくさんだ。これ以上徹底しようとしてもしょうがない。私が律法学者やパリサイ人たちよりも正しくなれるわけがない。」

それからイエスは、どういう意味でそう言われたのかを説明されました。イエスは、律法学者やパリサイ人たちによって教えられ、実践されていた律法の形として、例を5つ挙げ始めました。そして、それを、最初に神から与えられた時に意図されていた律法の在り方と対比されました。

イエスは、いずれの場合にも、パリサイ人たちによって教えられ、実践されていた律法のあり方と、神によって意図された律法のあり方との間にある基本的な違いは、パリサイ人たちが律法を厳格に外面的に守るものとして教え、実践していることだと示されました。

彼らは戒めを外面的な見地から守っていましたが、神はそれを霊的なものとして意図されていました。彼らは律法が霊的なものであり、自分の心や態度を律することを目的としていることを理解しなかったので、律法に対して完全に間違った対応をしてしまいました。

彼らは律法を見て、また自分たちが律法の要求を外面的に満たしているのを見て、非常に自己満足し、とても独善的で高慢になり、他の人たち皆に対して批判的になりました。

イエスは、パリサイ人の態度を適切に描写して、こう言われました。パリサイ人が宮に入って行ってこんな祈りをした。「神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、冒瀆する者ではないことを、感謝します。私は十分の一をささげ、これもし、あれもしております。」（ルカ 18:11参照）

イエスは、そのパリサイ人が律法に関して持っていた態度を完璧に描写しています。それは非常にうぬぼれた、独善的な態度でした。

しかし、神が律法を与えられたのは、人をうぬぼれさせ、独善的にするためではありませんでした。律法は、人に、罪の深さを示し、全世界を神の御前に罪ある者とするために与えられたのでした。

彼らの律法の解釈の仕方は、完全に間違っただけで、それは、律法に対して全く誤った反応をとらせていました。神の御前で自分たちの罪の深さを感じさせ、「神様。こんな罪人の私をあわれんでください」と叫ばせるよりも、むしろ、その解釈の仕方のせいで、自分たちには律法を守ることができていると感じていました。

しかし、律法は霊的なものです。彼らは外面的、表面的な面では全うしていたかもしれませんが、霊的な側面では完全に違反していました。

イエスが用いられた比較では、戒めはこのように教えられていました。「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は…」（5:22）

お分かりですか。それは殺人のもととなる憎しみ（怒り）のことなんです。それで、あなたが心の中であなたの兄弟に憎しみを抱いている（腹を立てている）なら、あなたは「人を殺してはならない」という律法を破ったことになりえるんです。

あなたがあなたの兄弟のことを役立たずだと思うなら、あなたは心の中ですでに彼を殺しているのです。「彼には何の価値もない」と思うなら、あなたの心は「人を殺してはならない」という戒めを破ったことになります。

「姦淫してはならない。」イエスは、「よいか、それは単に肉体的行為のことだけではないのだ」と言われました。

あなたがある女性を見て、彼女に情欲を抱くなら、あなたはすでに心の中で姦淫を犯しているのです。律法には、私たちが神の御前に罪ある者とする目的があります。

そして使徒パウロが言ったように、彼は、律法に関する限り、自分には非の打ち所がない、と考えていたことがありました。パウロはピリピ人に手紙を書いて言いました。「私は律法による義についてならば非難されることのない者です。」（ピリピ 3:6）

ああ、私にはできていた。私は安泰だったんだ。しかし、ローマの人々に宛てた手紙で、彼はこう言いました。「律法が、『むさぼってはならない。』と言わなかったら、私はむさぼり（が悪いことであるの）を知らなかったでしょう。」（ローマ 7:7）

それで、律法が欲望を律するものであることに私が気づいた時に、罪が生き、私は死にました。つまり、それは私を殺したのです。それは私を死に定めました。私には罪があったのです。

彼はずっと長い間、自分には罪がないと思っていました。でも、律法が霊的なものであり、自分が肉のものであることを悟ったら、「ああ、私は失敗したのだ」と分かったのです。

イエスが示しておられるのは基本的にそういうことで、律法が霊的なものであるということです。よって、人は神の律法を成就しておらず、また、成就することはできません。だから、あなたが天の御国に入ろうとするなら、あなたの義は律法学者やパリサイ人たちの義にまさるものでなければなりません。

でも、どうすればあなたの義が律法学者やパリサイ人たちを超えることができるでしょうか。なるほど、彼らの義は行いによるもので、あなたが行いによって義を達成しようとするなら、あなたが彼らにまさる見込みはありません。彼らは行いではずっと前にもうあなたを抜いてしまっています。

ですが、神は義のために別の基盤を確立されました。それは、神の完成された御業への信仰によって、神が人に授けてくださる、割り当ててくださる義です。人がイエス・キリストへの信仰を持つことにより、神はその人の信仰を義と見なされます。

そして、パウロはこう言いました。「私は律法によって私がかつて持っていた義を喜んで投げ捨てました。律法の下で私にとって得であったそのようなものをみな、私はキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、損と思うようになりました。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくと考えています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」（ピリピ 3:8-9）

ですから、神とのこの新しい関係では、信仰により義とされ、イエス・キリストを信じることによって神が私に義を授けてくださり、神が私を義と見なしてくださっています。それゆえに、私の義は律法学者やパリサイ人の義にまさるのです。なぜなら、神は私に律法学者やパリサイ人の義にまさる、イエス・キリストの義を授けてくださったからです。

そして、そこに、天の御国に入るための私の唯一の希望があるのです。それは、私を神の御前に義としてくださるために、イエス・キリストによって完成された神の働きに対する私の信仰です。

では、第6章に入りますが、ここでイエスはまず初めに、一つの原理を明確に述べられます。優れた教師の手法によく見られるように、原理が述べられた後で、その原理が例証され、詳しく説明されます。その原理とは、これです。

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。（6:1）

善行とは施しのことです。

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。（6:1）

イエスがここで語っておられるのは、あなたの行いの動機、あなたが正しい行いをする動機のことです。

あなたがこれらのことをしようとする動機が、人に認められたいとか、知られたいという願望から来るものではないようにしなさい。人に見せるために善行をしないように気をつけなさい。

聖書は私たちに、私たちは皆、キリストの裁きの座の前に立つことになり、私たちの行いがどういうものであったかによって裁かれることになることと告げています。私たちの行いは、実際には、その行いの背後にある動機によって裁かれるのです。どういう動機で私がそうしたのか、ということです。

そして、もし善行をする私の動機が間違っていれば、それらの行いには価値がなく、それらは木や草や藁のように焼き尽くされてしまいます。というのも、私たちの行いはすべて、火によって試されるからです。

私たちが主のために行った働きの多くは、焼き尽くされます。それらは煙のように消えてしまいます。

私が神の御前に清い心で、純粋な動機でおこなったこと、火によって試されて残るもの、私は、それらのものに対して、報酬を受けます。しかし、私たちの行いのすべては、それがどういうものであったか、あるいはその行いの背後にある動機が何であったかによって、裁かれることになります。

使徒パウロは彼の動機について語って、「**というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。（2コリント 5:14）**」と言いました。そして実際のところ、クリスチャンが奉仕をするための最高の動機は愛であり、それはクリスチャンが奉仕をするための唯一の正統な動機なのです。

私がすばらしいことを数多くおこなっていても、愛を持ってそうしていないなら、それらは無価値なものとなります。

たとえば、私は自分の持ち物を全部売って、その利益をすべて貧しい人たちに分配することだってできます。けれど、私は、新聞社に電話を入れて、こう言うかもしれません。「おい、記者を一人寄こしてくれ。私は家を売りに出しているんだが、貧しい人たちに何もかも譲ることにするから。」

そして一旦家が売れると、私は大きな看板を掲げるんです。「チャックの救済プロジェクト」そして、貧しい人たちや、カメラマンや、色んな人たちを皆招き入れて、私の持ち物を全部分け与え始め、貧しい人たちに食事をさせ、カメラマンのために笑顔を見せて立っているんです。

7チャンネルと5チャンネルが来て、写真を撮ります。私の顔も撮影してもらいます。「これは素晴らしいです。この男性が何をされたかご覧ください。まあ、何と素晴らしいことでしょう。彼はすべてを売って貧しい人たちに与えました。」

でも、お分りのように、私の動機は、私の笑顔を世間に公表して、みんなに「まあ、素晴らしいですよ」と言ってもらうことでした。

それが私の報酬です。だれもが「まあ、素晴らしいですよ」と言っています。そして私はその「まあ、立派ですよ」という言葉に、しっかりと聞き耳を立てて聞いておかなければなりません。なぜなら、それが私の得る報酬のすべてだからです。

そして私が神の御前に出て、神の御前に立つ時、私はテレビカメラに向かって微笑んだのと同じように、神に向かって晴れやかに微笑みかけます。主よ、私の功績をたたえてください。私は、お受けいたします。

神は記録をご覧になって、こう言われます。「おや、チャック。ここには何も書かれていないよ。」

私は言います。「主よ、ちょっとお待ちください。何も書かれていないとはどういうことですか。7チャンネルをご覧になりませんでしたか。あの人たちが私のことを素晴らしいと絶賛していたのをお聞きになりませんでしたか。」

「ああ、覚えているよ。あれがあなたの報酬だったのだよ。」

ここでイエスが言われているのは、基本的にそういうことです。あなたの動機が何であるかに気をつけなさい。自分に注目を集めるようなやり方でしないようにしなさい。人々の称賛や、大衆の喝采を求めないようにしなさい。

なぜなら、そういうことが陰にあって、自分の善行に注目を集めるようなやり方でそれをしているのなら、あなたが集めた注目が、あなたの受け取る報酬のすべてとなるからです。

だから、人に見せるために人前で善行をしないように気をつけましょう。

さて、ここにはバランスがあります。イエスはこれより先に、「**あなたがたは、世界の光です。**」(5:14)と言われたからです。明かりを隠すことはできません。ですから、あなたの行いは見られることになります。それは気づかれます。光を隠すことはできないのです。

あなたがたは世界の光です。ただし、「**あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。**」(5:16)

それは、いつも簡単にできるわけではありませんが、私たちはそれらの善行をするのに、人々が私たちのしていることを見て、私たちを称賛するのではなく、神をあがめるようなやり方でしょうとしなければなりません。

そして、当然、神に栄光をもたらすことだけがその背後にある動機でなければなりません。私が神を愛するからです。私は神に仕えたいのです。私は神のためにそれをしているのであり、それが神が受け入れてくださる動機なのです。

けれど、もしも私の動機が人から栄光や称賛や名声を受けることならば、私が受けるその栄光、称賛、名声が私の報酬となります。

中には、私たちは報酬を求めるべきではない、と言う人たちがいます。私たちが善人になるのは、ただそれが良いことだからという理由だけであるべきだと。それはやはり、非常に高潔な発言ではあります。

そして人はたいてい、非常に高潔な人だと思ってもらおうとして、そう言うものです。ですから、彼らはそう発言した時に、彼らの報酬を得ているのです。

人々が、「本当に素晴らしいですよ。本当に心がきれいで、何と純粋な動機でしょう。彼は何も報酬を求めていないんですよ。良い人だから、良いことをしたいだけなんですって。本当にいい人よね。」それはむかむかするほど不快ですし、また聖書の教えに反します。

イエスはここで何度も報酬について語られ、いかに私たちがそれらの報酬、つまり天の御父から与えられる報酬に関心を持つべきかを語られます。ですから、クリスチャンとしての歩みには、報酬の占める場所があるわけです。

ところで、救いは報酬ではありません。救いは、キリスト・イエスにあって、神が私たちへの恵みによって与えてくださるものです。

そして救いは、私がイエス・キリストに信仰を持つことによって、神が私に与えてくださるもので、私の行いや、努力やその他どんなことにも一切関係がありません。それは、私が単にイエス・キリストを信じることだけに関係し、神はその永遠のいのちという素晴らしい贈り物を私に授けてくださるのです。

神は永遠のいのちを私に報酬としてくださるのではありません。それは神の贈り物なのです。私は永遠のいのちを努力して得るのではありません。永遠のいのちのために働くことはできません。それは神の贈り物であり、行いによるものではありません。誰も誇ることはないためです。

しかし、神の子どもとして、神が私に課せられる責任があります。神は、私が神に仕えるための機会を与えてくださいます。

私は神の御前に立ち、私がここにいる間に神が私の前に置かれたそれらの義務や責任を、私がいかに誠実に果たしたかに応じて、報酬を与えらえることとなります。それで、私が神からのその報酬を望み、神からの報酬を求めることは、ふさわしいことなのです。

さて、イエスは、もしもあなたが人に見られるために人前で善行をするなら、人々があなたのしていることを見て、それを認め、そのことであなたを褒めてくれるという事実において、あなたは基本的にすでに報酬を受けていると言われました。

それからイエスは、三つの例を挙げてこの基本原理を説明されますが、その際、人のする三つの基本的な善行を取り扱われます。それは、施しをすることと、祈ることと、肉を殺すことについてです。これらのことを行うのには、それぞれに正しいやり方と間違ったやり方があるのです。

神に捧げものをするのには、正しいやり方と、間違ったやり方があります。間違ったやり方で捧げると、あなたはすでに報酬を受けてしまいます。正しいやり方で捧げれば、神はあなたに報いてくださいます。

ですから、それはすべて、あなたがどこで、まただれから報酬をもらいたいかということにかかっています。あなたは神から報酬をもらいたいのですか。それとも人からもらいたいのですか。

人の報酬で満足し、それを望む人たちがたくさんいます。7月4日の独立記念日には、私たちは盛大な花火大会を目にしますが、これらの打ち上げ花火は毎年どんどん派手になっていっています。

これらの色とりどりの火花が空中に散って行くのを見るにつけては、ドーンと音がして、様々な色が飛び出して、小さいのがひらひらと消えていくのを見て、だれもが「うわぁ」と言います。

たとえば、あなたは球場に座っているかもしれません。そして、この物体が炸裂すると、だれもが「うわぁ」と感嘆します。きれい、きれい、きれい。大きな閃光、見事な炸裂、だれもがそれに驚嘆しています。でも、ああ、それはあまりにも早く燃え尽きてしまいます。ただ一瞬だけなんです。ドーン。それで消えてしまいます。

世の栄光は、打ち上げ花火のようなものです。世界の表舞台に現れた人たちのことをあなたも見てこられたでしょう。彼らは世界の表舞台に現れて、みんなに「うわぁ、ほほう」と言われて、大きく閃いたかと思うと、まあ、あっけなく燃え尽きます。

彼らはすぐにいなくなります。新しく出て来た閃くスターたちにとって代わられるんです。世の栄光は、とても浅薄です。それは急速に通り過ぎます。

でも、空を見上げると、無数に光り輝く星々であふれています。ああ、それらの星々をよく見つめさえすれば、あなたにも素晴らしい、目を見張るばかりの栄光と美しさが見えるでしょう。それらはただ、ずっとずっと輝き続けるのです。

そして打ち上げ花火がその栄華を使い果たして、灰となって地に落ちたずっと後も、その星々はまだそこに存在しています。

ダニエルは言いました。「思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。」(ダニエル 12:3)

そしてそれはすべて、あなたがどちらの空で輝きたいかにかかっています。あなたには、みんなに「うわぁ、まあ」と言ってもらえるように、人の前で良い行いをすることもできます。パッとひらめくんです。みんなが意気高揚として、「彼が何をしたか知ってますか？見事ですよね。ああ、彼は本当に素晴らしい」と言って回っています。

あなたはじきに灰になり、皆から忘れ去られます。彼らは次の閃きを探し求めています。あるいは、あなたには、やり方によっては、神の輝きと美しさによるあの栄光にあって、神の御国で永遠に輝き続けることもできます。

だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。(6:2)

ここでイエスが大げさに話をされているのかどうか、分かりませんが、教会に捧げものを携えて行くのに、バンドを雇って先に歩かせ、いよいよ献金しようとする時に、バンドの男を立たせて、ラッパでファンファーレを吹き鳴らさせてから、前に進み出て、捧げものを置く人がいるというのは聞いたことがありません。

しかしながら、私は福音伝道者が礼拝の中でこう言うのを見たことがあります。「神は、今夜私のミニストリーに1000ドル(約10万円)の献金をしてくださる人たちが、ここに15名おられると、私に示されました。神を褒めたたえます。ハレルヤ。今、1000ドルを捧げるようにと、神に語り掛けられている15名の皆さん、その15名の皆さんに、お立ちいただきたいと思います。」

それから彼らは熱弁をふるって、しつこくくどき続け、ついには、「神を褒めたたえましょう。あそこの兄弟が立たれました。ああ、兄弟。神を褒めたたえましょう。ハレルヤ」となります。

その人は、小切手をかざして立っています。その伝道者は走って行って、その小切手を握ります。「私が直々に受け取ります。私が自分であなたの手からそれを受け取りますよ。」強欲な心です。

さて、神に関して、あなたは今捧げたその1000ドルの献金に対し、神からは何の報酬ももらえません。あなたはすでに報酬を受け取ったんです。なぜなら、ある意味で、あなたはラッパを鳴らしてしまったからです。

あなたは自分の献金を大々的に宣伝したので、あなたがどれほど気前よく捧げたか、誰もが知っています。あなたは立ち上がって、人々に拍手してもらいました。いいから、それを味わってください。あなたが手にする報酬はそれだけなんですから。

私に言わせれば、実際にそのような動機を持って献金をするよう人々に勧める人たちがたくさんいるというのは、全く悲しく、悲劇的なことです。なぜなら、それを動機に使う人々から資金を受けることで、彼らは、神がその人たちの捧げものに対して与えられるはずだった報酬を、その人たちから奪ってしまっているからです。

そして私はその福音伝道者たちの責任を問います。彼らはもっと分かっているはずで、羊というのは間抜けで、よく分かっていないことが多々あります。でも、そのようにしてお金を受け取っているこの人たちは、もっとよく知っているべきで、彼らには責任があるのです。

主は、あなたがたは人に見られるように大々的に捧げるべきではないと言われました。見せびらかしてはならない。あなたが神に捧げたものことで大騒ぎしてはならない、と。

あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。(6:3)

ただ捧げるのです。そのことで大げさに騒いではいけません。

あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(6:4)

ですから、私たちが捧げる時は、簡素に、地味にしなければなりません。私たちが神に捧げるのは、パウロがコリント人への手紙で言っているように、決して嫌々ながらも、強いられてでもいけません。

私たちは、決して強制されて神に捧げるべきではありません。神は、人々が強いられたから捧げるのを望んではおられません。

パウロはこう言いました。「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」(2コリント 9:7)

何でもあなたが神に喜んで捧げることができるものを捧げてください。喜んで神に捧げることができないものは、取っておいてください。神はそれを望んではおられないし、神はそれを必要ともしておられません。

神に捧げることは、常に、私たちの家族と主との間の個人的な問題であるべきで、それは、私たちが主を愛するが故に、行うものです。私たちは、主への愛によって動かされるのです。私たちは人から認められるのを求めているのでもなく、自分の気前の良さや神への献金のことで、人に大いに称賛してもらおうとしているのでもありません。

ですから、あなたが施しをする時は、簡素に、陽気な心で行い、その動機が主への愛によるものであり、人に見られたいという願望によるものではないようにしましょう。

また、祈るときには、(6:5)

祈りにも、正しい祈り方と間違った祈り方があります。

偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。(6:5)

祈りは、ユダヤ人の暮らしにおいて、非常に重要なものでした。一日に二度、ユダヤ人はシェマーを唱えなければなりませんでした。それは旧約聖書中の三か所の聖句から成っており、申命記6章にある次の聖句で始まります。「主は私たちの神。主はただひとりである。心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

彼は朝一番にそれを唱えなければならず、また夜寝る前にもそれを唱えなければなりませんでした。彼はそれを朝9時まで、夜9時まで唱えることになっていました。一日に二度、ユダヤ人はシェマーを唱えるのでした。

それからシェモネ・エスレという、二つ目の祈りの形式があります。シェモネ・エスレというのは、実際には、18項の個別の祈りのことで、後に19個目の祈りが加えられましたが、依然として「18」を意味するシェモネ・エスレという名が使われています。

彼らが子供のうちに暗記する祈りが18項あって、彼らはそれを一日に三度、午前9時と、正午と、午後3時に、唱えなければなりませんでした。

彼らは同じ祈りを毎日、朝、昼、晩に唱えなければならなかったもので、それは習慣になりました。何でも習慣になるとそうですが、それは彼らの多くにとって、完全に無意味なものとなりました。

それは義務になったのです。やらなくちゃいけない。だから、できる限りの早口でこれら18項の祈りを唱えて、急いで終わらせます。それは務めなんです。

しなくちゃいけない。あ、9時だ。そら行くぞ。そして18項の祈りを急ぎ足で済ませます。そして12時になります。またやる時間だ。そしてその同じ18項の祈りを急いで終わらせます。

それを背景にして、朝9時になると自分たちが街角のよく目立つ場所に来ているように、タイミングを計っている人たちがいました。

9時です。祈祷用ショールが出てきます。さらり、さらりとそれを身にまとい、18項の祈りを唱えて行きます。そして皆が、ああ、素晴らしいなと言うんです。彼は忙しいのに、街角に立ち止まって、18項の祈りをするんです。まあ、あの人は宗教熱心に違いない。

そして、18項の祈りを唱えながら、「ああ、皆が私のことを見ているぞ。私がどれほど宗教熱心か、みんな分かっているんだ」と考えていることも可能なんです。「彼らは私が聖い者であるのを知っている。私がいかに正しいかをだれもが知っているなんて、素晴らしいじゃないか。主よ。感謝します。」

何でも私たちが何度も何度も繰り返して言うと、その言葉は容易に無意味なものになり得ます。私たちの脳内には、小さなパターン群が形成されます。そして、その特定のチャンネルにダイヤルを合わせてボタンを押すだけで、私たちは考えなくてもそれを言うことができます。

「これから私はねむりにつきます。神様、私の魂をお守りください。もし目覚めるまえに死んだなら、神様、私の魂をお召しください。」本当なんです。ボタンを押せば、出てくるんです。小さな人形の紐を引っ張るようなものです。

それはただ、プログラムされているだけなんです。「神は偉大なり。神は善なり。お父様、この食事を感謝します。」これとは全然違うことを考えながら、これらの言葉を口にすることができるんです。自分が何を言っているか考えなくてもいいんです。機械的にそらで言うことができるからです。

そのように、それらは意味のない言葉の反復になります。それで、まず第一に、私は祈る時に、自分が祈りの人であることをみんなに見てもらえるようにと、目立つ場所に行こうとするべきではありません。

私はある聖職者の評判を耳にしました。だれもが、「ああ、彼はすごい祈りの人です」と言っていました。それで私はぜひこの人に会いたいものだと思っていました。祈りの人であるという彼の評判を聞いていたからです。

そしてある時、私がある夏合宿でメッセージをしていた時、彼もまた同じ合宿に来ていたんです。そして私は、彼がどのようにして祈りの人という評判を得たのかを発見しました。

毎朝6時になると、礼拝堂でこの人が祈っているのが聞こえてきました。合宿所のどこにいてもこの人が祈るのが聞こえるんです。6時から7時まで、彼が礼拝堂で祈って主に呼ばわっているのが聞こえました。

そして私は何度も疑問に思いました。神は私たちが祈りの人としての評判を得るのを望んでおられるだろうか。それよりもっと良いのは、こっちの方ではないかと。

あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

(6:6)

驚くにはあたりませんが、その人がその祈りの生活から得る報酬は、彼が祈りの人として極めて高く評価されているという事実ではないでしょうか。そして彼はその評判をすごく大事にしている、何としてもその評判を保とうと、自分が祈っているという事実みんなが気づくようなやり方で祈っています。

私たちは、動機に気をつけなければなりません。祈りでさえも、私が祈り求めるものは動機によって試されるのです。ヤコブは「**あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです**」と言いました。それから彼はこう付け加えました。「**願っても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。**」(ヤコブ 4:3)

つまり、私が間違った動機を持って祈ることもあり得るということです。動機と言うのは、非常に重要なものなのです。

だから、聖書には、「**ひとりひとりが自分を吟味しなさい。もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。**」(1コリント 11:28, 31)と書かれています。「私はなぜそうしたのだろうか」と吟味するのは良いことです。

私には、それがいつも分かるわけではありません。私が自分自身を欺くこともあり得ます。

ダビデは、自分の個人的な動機に関して、自分で自分を欺いている可能性があることを認識し、次のように言いました。「**主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。そのような知識は私にとってあまりにも不思議、あまりにも高く、及びもつきません。**」(詩篇 139:1-2, 6)「主よ。私には自分のことが本当には分かりません。」

それで、ダビデはその詩篇をこう言って締めくくります。「**神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て(ください)。**」(詩篇 139:23)

ああ、神よ。私を探ってください。神よ、私に示してください。私の心にあるものを明らかにしてください。私は自分を欺いているかもしれないからです。でも、私は神を欺いてはいません。神は心を探られるからです。

神は、私がすることすべての背後にある動機をご存知です。そして神は、私が時間を無駄にしたいくないことをご存知です。私はやるなら、正しい動機でやって、それに対する報酬を主からいただきたいのです。

ですから、祈る時、自分に注目を集めるために祈ったり、人に好印象を与えるために、人に見られるように祈ったりしないように、気をつけてください。

裏にあるのは、人に好印象を与えようとする考えです。人に好印象を与えるために祈らないように気をつけてください。祈りの目的は人の心を捉えることではありません。その目的は神の心を捉えることです。

「自分の奥まった部屋に入って、戸をしめなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに公然と報いてくださいます。」

二つ目の否定命令はこれです。

また、祈るとき、(異邦人のように)同じことばを、ただくり返してはいけません。(6:7)

当時、彼らは次の理由でそうしていました。

彼らは、ことば数が多ければ聞かれると思っているのです。(6:7)

祈りを有効にするのは、祈りの長さでも、祈りに費やされる時間でもありません。聖書に記録されている祈りは、とても短いものです。

私たちはしばしば、祈りは、私たちがひざまずいて1時間経たないと、本当に効果的なものにならないと考えがちです。でも、そうではありません。神に語り掛ける時に、意味のない、型にはまった言い回しをちょこちょここと並べて時間を埋めても意味はありません。

神のもとに進み出るときは、座って、用件を神に言明し、あなたの心を打ち明けるのです。神に心を開き、神の御前に明確に述べ、手短に、完結にするのです。

あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。(6:8)

祈りというのは、「神様、今日私の生活で上手くいかなかったことを今すべてあなたに申し上げます」という、情報提示の機会ではありません。神は上手くいかなかった物事をすべてご存知です。私が神にそれを詳しく述べる必要はありませんし、私の必要を長々と並べ立てる必要もありません。

神は私が願う前に、私に必要なものをご存知です。だから、ただ時間を埋めるために無駄な復唱をしないでください。異邦人はことば数が多ければ聞かれると思っていますが、祈りを効果的にするのは、ことば数の多さではありません。

イエスはそれから、模範となる祈りを私たちに与えてくださいました。多くの人たちが、この祈りの模範をそのまま無駄に繰り返し唱えるのは、悲劇的なことです。

彼らはこの模範の祈りを何度も何度も唱え、また、懺悔に関する限り、そうすることをしばしば勧められます。「聖マリア」とか、「我らの父よ」というのが何度も何度も聞かれます。それらは無意味な反復以外の何物でもありません。

それはまさに、イエスが非難されたことです。ことば数が多ければ聞かれると思っている、と。でも、そうではありません。

暗記した主の祈りをただ繰り返すことには、実際、何の価値もありません。あなたがそれを非常にゆっくりと時間をかけて、一句一句、本当に熟考し、瞑想するなら、それには多大な価値があります。しかし、基本的には、イエスはそれを模範的な祈りとして与えられました。

そしてイエスが模範となる祈りを私たちにくださるに当たって、まず初めに、祈りというのは常に関係に依存するものですから、その祈りの始めが関係を表すものであるのは重要なことです。

(天にいます) 私たちの父よ。(6:9)

もしも、彼があなたの父でないならば、あなたには神に呼びかける権利がありません。

パリサイ人たちが、盲目だった人に、どうやって癒されたのかと盾突いた時、その人は「あの方が来られて私に手を置かれました。(私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。)私はいま見えるのです」と言いました。

さあ、あの方は何をしたのか。「いやあ、私はもうお話ししましたよ。」すると、彼らはこう言いました。**「神に栄光を帰しなさい。私たちは、あの者については、どこから来たのか知らないのだ。」(ヨハネ 9:15, 24, 29)**

「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は盲人の目をおあげになっています。あの方はメシアの働きをしておられます。」そして彼らはその人に腹を立てたのでした。

その人は言います。「おや。私たちは神が罪人の祈りを聞かれないことを知っています。神があの方の祈りに答えておられるのなら、あの方は何か正しいことをしているに違いありません。」

ここで、それが必ずしも聖書による真理ではないことにご留意ください。これはパリサイ人たちに向けて、元盲人が発した言葉であり、実際は神は罪人の祈りをお聞きになります。少なくとも、一つの祈りは聞かれます。

「神よ。罪人である私を憐れんでください。」神がこの祈りを聞いてくださるのは、ありがたいことです。

それでも、ダビデは言いました。「もしも私の心にいただく不義があるなら、主は私が祈っても聞き入れてくださらない。」それは神の真理です。

「主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなったのだ。」それが神の真理です。罪が人を神から切り離すのです。

しかしながら、祈りには関係が関与しています。その関係とは、子どもが父のもとに来るというものです。私はイエス・キリストへの信仰によって、神の子どもとされています。それで私は「父よ」と言うことができるのです。

天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。(6:9)

「あがめられる」という語は、尊い（おそれおおい）とも訳すことができます。ユダヤ人たちが神の名前に対し、非常に高い敬意を払っていたことはご存知ですね。事実、神の名前に非常に高い敬意を払っていた彼らは、自分たちの唇が神の名前を口にすることにふさわしくないとまで思うようになりました。

最終的に、彼らは、自分たちには神の名前を心で考える値打ちもないとまで思うようになりました。そこで、書士たちは、聖書を書き写すのに、神の名前に差し当たると、母音を書かないで、子音だけでYHVHと記しました。

それを発音してみてください。母音なしでは、それがどう発音されるのか分かりません。というわけで、今日まで、私たちは神の名前をどう発音するか分からないのです。

しかし、書士たちは、写本にYHVHと書く以前の段階で、入浴し、洗濯したての服を身に着け、新しいペンを取り、それを新しいインクに浸し、それからYHVHというそれらの子音を書くのでした。

主の名前が5~6回も記載されている一節を想像してみてください。それでも、彼らの間では、書き写している時に必ずこの儀式的な入浴をし、洗濯したての服を着て、それからYHVHという子音を書くのが、ちょっとした伝統になりました。

その名がエホバと発音されたのか、ヤハウエと発音されたのか、私たちには本当には分かりませんが、ほとんどの学者たちは、ヤハウエであったと考えています。

しかし、神の名前の発音は、ユダヤ人の間のこの伝統のせいで失われてしまいました。ああ、しかし、彼らはどれほど神の御名を尊重したことでしょう。

詩篇では、詩篇作者が「**主の御名は聖であり、おそれおおい**」（詩篇 111:9）と宣言します。ここでは、基本的に、同じことが主の祈りの中で言われています。

御名があがめられますように、あるいは尊ばれますように。一体全体、どうやって人間の名前に「尊い師 (reverend)」とくっつける習わしが始まったのか、私には分かりませんが、私は自分のことを尊いチャック・スミス師などとは全然思いません。

チャックという名前には、まったく尊いところはないと思います。でも、残念なことに、彼らは尊いチャック・スミス師 (Reverend Chuck Smith) と言い始めて、それからもっとあなたを得意にさせようとして、もっと丁寧に「チャック・スミス尊師 (The reverend Chuck Smith)」とします。

それから、彼らはもうちょっとあなたを得意がらせようとして「最も尊敬すべきチャック・スミス(尊)師 (The most reverend Chuck Smith/The most right reverend Chuck Smith)」と言うんです。彼らはそうやって人間に色んな肩書きを付け加え始めます。それは何と悲劇的で残念なことでしょう。私は本当に称号なんかほしくないんです。

主の御名はおそれおおく、あがめられます。でも、誰のものであっても、人間の名前はそうではありません。知らずにその称号を取り入れる人たちは大勢いますが、私はそれを受け入れません。

私に手紙を書く際に、「尊いスミス師様」とか「尊いスミス師」などと書く人たちがたくさんいますが、これには笑うしかありません。その人たちが私のことを知らないのは明らかです。私は自分が尊い師であるとは全く思わないからです。

私は神をあがめ、神の御名をあがめます。でも、私の名前には尊いところは全くありません。私はそのことで大騒ぎはしませんが、それは、人によって始められ、続けられて行くものの一つに過ぎません。

それは人間を賛美することであり、私は人間を賛美することの正当性を信じません。私は、神の御前にいかなる人間も誇るべきではないと確信しています。

主をあがめましょう。主の御名を尊んで崇めましょう。人間をあがめるのはやめましょう。自らを高める者は、主が低くされるからです。

そして、次は、認識です。まず最初は関係です。「私たちの父よ」。そして「天にいます」との認識です（*日本語では逆の順序）。「御名があがめられますように。」

あなたの御名は聖く、おそれおおい。私は今、宇宙を造られた神に語り掛けています。神はエレミヤに言われました。「**見よ。わたしは主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。**」（エレミヤ 32:27）

私は祈る時にそのことを覚えていなければなりません。なぜなら、私は祈る時にしばしば、私自身の限界を持ち込むからです。これは私にはつらすぎる。私の手には負えない。私には無理だ。

そしてしばしば、私はその問題に圧倒されて、あたかも、私が圧倒されたから、きっと神も圧倒されるはずだという風に、その敗北感を私の祈りの生活に持ち込みがちです。

ですから、祈りにおいては、私が語り掛けているお方のことを認識するのが非常に重要なのです。私たちは、ヘブル人への手紙の中でこう教えられます。「**神に近づく者は、神がおられることと、(神を求める者には報いてくださる方であることとを、)信じなければならないのです。**」（ヘブル 11:6）

神がどういうお方だと？神は永遠の神であられ、イエスが言われたように、知っておられるお方で、私たちの願うところのすべてを越えて豊かに施すことのできるお方であるということです。

「御名があがめられますように」というのは、実際は嘆願です。神の御名が人から尊ばれ、大いに重んじられ、あがめられますようにという祈りです。

御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。（6:10）

さらなる嘆願です。でも、初めの三つの嘆願は、すべて神に関連するもので、私に関するものではありません。私の祈りの主眼は、神のみこころが成るようという願いであるべきです。

祈りを、それによって私の望みをかなえてもらうことのできる媒体として考えるのは間違っています。神は、決して、祈りを私の望みが聞き届けられるための手段にしようとはされませんでした。

神は、この地球という反抗的な惑星の上でご自身のみこころを成就するのに、祈りが、それによって私が神と協力して働くための手段となるように意図されました。そして本当の祈りは、神から始まります。神の目的とご計画です。そして祈りは、決して神の目的を変えることを目的としてはいません。

私は、私がこれまでに正しく祈って受けてきたものはすべて、私が祈る前からすでに神が私にくださることを決め、計画しておられたのだと確信しています。

ではなぜ祈るのかと思われるでしょう。それは、神が私を自由意志を持つ道徳的主体として作られたからです。神は私に、選択する能力を与えてくださっており、神は私の選択を尊重し、私の自由意志を侵害されることはありません。

神は、私のために神にさせていただきたいと思うこと、また、神が私にしてくださるのを私が許すことだけを、私にしてくださいます。そのため、祈りは、神が私のためにずっとご計画し、なさりたいと思っておられながらも、私の意志に反してはなさらないことを、してくださるのを可能にします。

イエスは、ヨハネの福音書第15章で、弟子たちに次のように言われました。「**あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行って実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになる (mayでありshallではない) ためです。**」（ヨハネ 15:16）

神はそれをあなたに与えたいと願われ、あなたのためにそれをしたいと願われています。しかし、神は、ご自身があなたにお与えになった自由意志に逆らったり、それを侵害されたりはしません。

しかし、祈りは、神がずっとしたいと願われていたけれども、あなたの意志に逆らったり、それを侵害してまじょうとはされないことを、あなたのためにして下さるのを可能にします。

ですから、祈りは神から始まります。つまり神の目的からです。祈りの本当の目的は、私の思うままにしてもらうことではありません。そして、これが昨今、テレビやペンテコステ派の間で非常に人気の出ている教師たちの、誤った考えなのです。彼らの悲劇は、神学的な深みに欠けていることです。

人々はあまりにも浅はかで、新しい教えが出てくると何でもその後を追って行きます。それは何か新しい概念をふれ回る人間たちの狡猾さのようで、誰もが彼らの後にただらとついて歩き始めます。

そして今や祈りは、あなたが王の杖をつかんで世界を支配するためのものとなります。あなたが神に要求します。主張し、言い張り、祈り、信じます。神は、あなたが神に願うことを何でもしなければならぬのです。そうではありません。

神はあなたの願いを叶えなければならない小さな魔人などではありません。神は宇宙の主権者であられ、宇宙を支配しておられます。そして言わせてもらえば、私は、答えられなかった私の祈りのすべてについて、神に感謝しています。

もしも神が私の祈りに全部答えておられたら、私はこの世界を滅茶苦茶にしてしまっていたでしょう。私が、実際にはよく理解していないことについて祈っていたからです。私にはそれが部分的にしか見えていなかったからです。私は自分がすべてを知っていると確信していましたが、部分的にしか分かっていなかったのです。

私は部分的な知識に従って祈っていたのですが、すべてが分かった時、私は「うわあ。神がああ祈りに答えてくださらなくて良かったあ。とんでもない苦境に陥るところだった」と安堵しました。

神に主権者でいていただきましょう。神に神であっていただきましょう。神を神として称え、祈りの本当の目的は自分の願いを成就することではなく、神のみこころがなされることであることを悟りましょう。「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。」

確かに、私には必要があります。確かに、私が自分の必要のために神に嘆願するのは、適切で正しいことです。そのため、次のように、私たち自身の必要を取り扱う嘆願があるのです。

私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。(6:11)

私たちの生活と、命の維持のためにどうしても不可欠な食糧のことです。

私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。(6:12)

そして赦しというのは、ものすごく大事なことなんです。留意してもらいたいのは、初めの嘆願は現在のことを扱っています。それは私の目下の必要です。今日お与えください。二つ目の嘆願は、過去のことを扱います。赦しです。

それは私がこの瞬間まで犯してきた過ちの一つです。私たちの負いめをお赦しください。それは過去を扱います。そして次です。

私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください。(6:13)

それは未来です。神よ。手綱を引き継ぎ、未来へと私の人生をお導きください。それで、これらの嘆願では、過去と現在と未来が扱われているわけです。

取り扱われているのは、私の糧のこと、私の赦しのこと、私の導きのこと、私の救いのことで、これら個人的な請願です。そしてそれらのことが、私個人の生活に関して私が神のもとに行く必要のある基本的な問題なのです。食糧、赦し、導き、救いです。

そして祈りは神へと戻ります。

国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。(6:13)

さて、祈りは実際には三つの形をとります。祈りは賛美です。祈りは、ただ、神の偉大さと栄光を認識し、畏れることです。

これは祈りの中の重要な部分です。主がどういうお方であるかをただ賛美するのです。神に何を願うするのではなく、私が神の偉大さや、神の栄光や力を認識し、意識するにあたって、ただ神を賛美するのです。

それは、砂漠の空を見上げる時に感じるあの感覚です。ああ、神は何と偉大なんだろう。ああ、神は何と大きいなんだろう。ただ、その神の偉大さに対する認識と、意識と、畏れです。

それは、美しい花を見る時に感じるあの感覚です。ああ、神は何と美しい創造力を持っておられるのだろう。それは、また、子どもが生まれるのを見る時に感じるあの畏敬の念です。ああ、神は生命体を何と賢く設計されていることか。賛美です。

祈りはまた嘆願でもあります。狭い意味では、私自身の必要のために神に願うことです。しかし、その三つ目の形態における祈りは、執り成すことです。そこで私が求め、神に嘆願しているのは、私の周りの失われた世の必要のためです。

そしてこれら三つのすべてが、イエスのこの模範的祈りに表されています。「**わたしの国が来るように。天におけるのと同様に地でもわたしの意が行われるように。**」御国のための執り成しです。

「**私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。**」私自身の必要のための嘆願です。「**国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。**」畏怖、感嘆、神の栄光と偉大さ。賛美です。

祈りは礼拝で始まって礼拝で終わることにお気づきください。私たちはたいてい最初に嘆願をして、それから執り成しへと移ります。でも、模範的な祈りでは、まず執り成しがあって、それから嘆願へと移っていきます。

順番は重要だとは思いませんが、私は、祈る時には三つの形態全部が伴うべきだと思います。時間をかけて神を賛美すべきだと思います。

私たちは執り成しの祈りに時間をかけるべきだと思いますし、私たち自身の個人的な必要を神に嘆願することにも時間をかけるべきだと思います。

興味深いのは、私たちが行うこれらの様々な嘆願において、赦しの請願は、私たちの赦しを前提としていることです。「**私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。**」(6:12)

すると直ちに「では、これは行いなのか」という疑問が湧いてきます。そして神が私を赦してくださるのは、私が他者を赦すことに依存しているのでしょうか。

もしそうならば、赦しというのは行いに依存しているのでしょうか。そんなわけで、神学上の複雑な問題に出くわします。イエスは何と言われるのでしょうか。

もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。 (6:14-15)

さて、皆さんは私にそれを変えてほしいと思われませんか。イエスのみことばを変更する責任を私に負ってほしいと思われませんか。

あなたは「でも私には理解できません」と言います。でも、待ってください。神はあなたに理解しなさいとは命じませんでした。神はあなたに信じなさいと命じられました。ですから、私は、私たちが赦しの重要性を理解し、私たちが赦さなければならないこと、それもペテロのように計算するような問題として考えるものではないことを理解することが、何としても不可欠だと信じています。

「**主よ。兄弟が私に対して罪を犯したばあい、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。**」ペテロは、七度と提案した時、同じことで人を七度も赦すことを想像することができる自分のことを、寛大な人間になってきていると思ったはずですが、でもイエスは言われました。「そうではないよ、ペテロ。七度を七十倍するまでです」(18:21-22)。490回です。おや、おや。あら、まあ。主よ。

さて、赦しというのは計算上の問題ではありません。イエスは、彼が490回に至る前にいくつ数えたかが分からなくなってしまうと、赦しは神の子ども達の心の問題だと気づくだろうと判断されました。

余りにも多くを赦された者として、赦すことは私の義務です。イエスは、ある時、しばしばそうされたように、要点を説明するために馬鹿げた例を用いて、興味深い例を一つ示されました。

主人に1600万ドルの負債がある男がいました。その主人は彼を呼んで、「さあ、この貸し付けについては時間切れだ。貸した分を返してくれ」と言いました。するとこの男は言いました。「ああ。お支払するためのお金がないんです。今すぐには払えません。もう少しお時間をください。」

主人は、「ああ、もういいよ。借金は帳消しにしよう」と言って、1600万ドルの負債を取り消しました。この僕らは出て行って、自分に25ドルの借りがある仲間の僕を捕まえて、彼の喉元をつかんで言いました。「いいか。俺の貸しを返せ。」

その仲間の僕は、「それがその、妻が病気で、医者代を払わなくてはならないんです。今すぐには払えないけど、少し時間をください。返済しますから」と言いました。

「いや、ダメだ。今まで時間は十分にあったんだから。」そして彼は保安官を呼んで、その人を債務者監獄に投げ込ませました。

その僕の主人は、彼がしたことを聞いて、彼を呼び出して聞きました。「ええっと。お前はいくら私に借りがあったのだったかな。」彼は「1600万ドルです」と言いました。

主人は言いました。「私はお前の負債を帳消しにしなかったかな。」「していただきました。」「では、お前が25ドルの負債のために仲間の僕を債務者監獄に送り込んだと私の耳に届いたのはどういうことかな。」

主人は保安官を呼んで、「彼が最後の一文を支払うまで投獄しておきなさい」と言いました。最後の半ペニーまでです。(18:23-24)

それからまたイエスは、あなたが神から非常に多くを赦されているという事実を強調されました。負債のことで兄弟を責めるあなたは何者ですか。

ですから、私たちは赦されているから、赦します。そして自分が赦せば、私たちは赦されます。自分が赦さなければ、私たちは赦されないとイエスは言われました。私には、イエス・キリストの言われたことを修正するつもりは全くありません。私はただそれに従い、寛容になり、赦すつもりです。

神さま、助けてください。それは私の性分にそぐいませんから。私の本性は、仕返しをしたがります。私の本性は当然の報いがあればいいと思います。私の本性は、どうしても赦したがりません。

私の車は、カギで片側を端から端まで引っ搔かれてしまいました。誰がやったのか知りませんが、私はその人を赦したくありません。私の車からスーツが二着盗まれました。そのスーツは汚れていたんです。

まだクリーニング屋に持って行ってもなかったんです。私の着るサイズのスーツで何ができるのか分かりませんが、とにかく彼らはそれを奪って行きました。私はクリーニング屋に持って行こうと思ってそれらのスーツを車に入れておいたんです。誰がやったのか分かりません。

お分かりのように、私の本性は、どうしてもそれを赦したがりません。私はカギで車を引っ搔いたその人を捕まえたいたいです。でも、ありがたいことに、神は私の心に「まあ、いいか。どうせ全部燃えるんだ」という気持ちを入れてくださいました。

人々に知られるようになると、そのためにあなたは一定の代償を支払わなければならないようになります。多くの人に知られれば、知られるほど、より多くの人に嫌われるのです。

割合でいけば、あなたのことを憎む人たちが一定の割合で出てきます。それで、人々に知られれば知られるほど、あなたは敵を増やすことになります。

だから、誰かが「カルバリー」というナンバープレートを見て、それが私の車だと気づいて、「おお。懲らしめてやろう」と思ったんでしょう。そんな憎しみや苦みを抱えて、あんな悪質な危害を加えるとは、あわれな人です。でも、私は赦さなければなりません。

いけません。私はそのことに煩わされるわけにはいかないんです。私にはそれを腹の中で煮えたぎらせることはできません。それでどうなるかご存知ですか。もしも私がただこのことを考え続けて、このことに想いふけて、ただ怒りを増して行ったら、おや、まあ、こんなことになるんです。

私の体には、いくつかの小さな腺があって、それらが化学物質を作り出し始め、私を内側から食い尽くし始め、私を内側から破壊し始めるんです。

イエスは私たちが赦すことが重要であることを知っておられました。私たちが憎しみに満ちず、また、苦々しさや敵意や怒りといった感情を内側に持ち続けられないことの大切さを知っておられました。それは、イエスが体内の化学系のことを知っておられたからです。

イエスは化学物質のことを知っておられます。私が苦々しさや、怒りや、復讐やら何やらといったような思いを抱えている時に、私の腺で作られる破壊的な化学物質のことをご存知です。

だから、大昔にあなたに不当なことをした人に対して、あなたが心に悪意を抱くことなく、その人を赦すのは、あなた自身のためなのです。

赦そうとしないため、持ち続けた苦々しさのために、自らの肉体を破壊してしまった人たちが大勢いるのは悲しいことです。だから、赦しましょう。

三つ目に挙げられている義の行いは断食です。やはり、正しいやり方と、間違っただけのやり方があります。

断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。しかし、あなたが断食するときには、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。(6:16-18)

ですから、やはり、自分に注目を集めてはいけません。断食するからすごく信仰熱心だと、人から畏敬と感嘆を受けるようなやり方でそれをしてはいけません。

私が奉仕の務めについて最初のうちは、かなり頻繁に断食をしていました。見れば分かりますが、私はもうあんまり断食はしていません。

でも、初めのうちは私はよく断食をしていました。そして牧師として家庭訪問に出かけると、優しい女性が自分で焼いたケーキを出してくれるんです。

それまで2~3日断食していたんですから、どうしたらいいんですか。「ああ、ありがとう。でも断食中なんです。」違います。私は断食を解いて、ケーキをいただきます。なぜなら、もし私が「ああ、ダメなんです。断食中だからいただけないんです」と言ったら、その時点で報酬を受け取ったことになると思ったからです。

私は人からの報酬を求めていたわけではありません。私は神からの報酬をいただきたかったんです。

だから、食べ物を出された時は、何とか食べずに済めばそうしていましたが、手作りのケーキを出されたら、逃げようがありません。彼らは彼らの報酬を求めているのです。「ああ、美味しいケーキですね」と言ってもらうのを。

さて、イエスはこの教えにおいて、私たちの宝についてお話しされるに連れ、別の領域に移られます。そして、基本的に、否定的にこう言われます。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。(6:19)

数年前に、大勢の人が金銀を買おうとした大きな動きがありました。彼らの購入で、需要が生まれ、人為的な価格ができました。インフレのために、彼らはインフレに対するヘッジとして金銀を購入し始めたのでした。

そして、インフレに対するヘッジとして金銀を買うようにと、手紙を書いて人々に勧めている人たちが3人いました。

彼らはこの人たちが持っていた価値のないドルを喜んで引き取り、価値のないドル、あるいはじきに価値のなくなるドルと交換に、喜んで金銀を売りました。彼らはとても寛大でした。

私は、どうして彼らが私の価値のないドルを引き取って、代わりに私に金をくれるのか、いつもちょっと疑わしく思っていました。もしも金がそんなに価値のあるものになって、ドルが価値のないものになってしまうのなら、どうして彼らは私にそんなに親切にしてくれて、彼らの価値ある金と引き換えに私の無価値なドルを引き取ってくれるのでしょうか。

でも彼らはそうしていたんです。ですが、私は少しも買いませんでした。なぜなら、ヤコブの手紙に、終わりの日について語って、こう書いてあったからです。「**聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。あなたがたは、終わりの日に財宝（金銀）をたくわえました。」**（ヤコブ 5:1, 3）

しかし、今やあなたがたの金銀にはさびが来て、何の価値もありません。

彼らがそれを読んでいさえすれば良かったのに。後に銀市場は崩壊し、彼らは、未来のために銀で購入にしておいた数十億ドルを失って、泣き叫ぶことになるのでした。

彼らがヤコブの手紙を読んでさえいたら、あんなにみじめな思いをしなくて済んだはずですよ。銀は現在、また1オンス（約30g）が5ドルになり、金は300ドルくらいに下がっています。そうやって、あなたはあなたの買ったものの価値がすべて消えうせていくのを見るんです。

1オンスが800ドルだった金が、今や1オンス300ドルです。あら、あら。1オンス800ドルも出して金を買った人たちのことを大変お気の毒に思います。手放さないで持っているといいですよ。金は返り咲くから。そんなことはありません。

主は言われます。「ほら。自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。」金の価値は下がるものです。銀の価値も下がります。それは虫やさびでダメになってしまうことがあります。盗人が押し入って盗むこともあります。

自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。
(6:20)

イエスがこう言われたのには理由があります。なぜあなたは、ここ地上ではなく、天に宝をたくわえるべきなのでしょう。その理由はすべて、次のことにあります。

あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。 (6:21)

もしもあなたが自分の宝を地にたくわえてきたなら、あなたの関心はこの世の物質的なものにあることになり、もしもあなたが自分の宝を天にたくわえていたら、あなたの関心は天にあるもの、霊的なものにあることになり、

一方は一時的なもので、他方は永遠のものです。そしてあなたが自分の宝を地にたくわえるなら、それらはせいぜい一時的なものです。あなたが天に宝をたくわえるなら、それらは永遠のものです。

イエスは、人々にはとても理解しにくい、非常に興味深いたとえを語られました。それについては、ルカの福音書の学びに入ったら取り扱うことにします。

それは、仕事をクビになろうとしている男の話で、彼は主人のために経理を担当していました。そこで彼は債務者たちを呼んで、「私の主人にいくらの借りがありますか」と尋ねました。「油百バテです。」彼は、「さあ。あなたの証文を書き換えてあげよう」と言って、五十バテと書きました。

「あなたはいくら借りがありますか。」「小麦十コルです。」「さあ。書き換えてあげよう。」

彼はそれを小麦五コルに変えました。彼は債務者たちを皆呼びいれて、彼らの債務を半分にしました。なぜなら、二週間経つと失業すると分かっていたからです。

それで彼は、自分が失業したら、「ほら。私が半分にしてあげたあの明細書のことを覚えてますか。実は私、今ちょっと物入りなんですよ」と言って回れるようにしたのです。

そしてその人たちは彼がしたことのために、彼に恩を感じることでしょう。イエスはこう言われました。「**その主人は、『この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けめがない』**と言って、**管理人が不正を働いたことではなく、こうも抜けめなくやったことをほめた。**」（ルカ 16:1-8）

お分かりでしょうが、彼は自分の将来を確立するために、現在の地位を利用していました。イエスは、皆さんに、ほぼ同じことを命じておられるのです。将来を確立するために、現在を用いなさい、と。今ある機会を用いなさい、なぜなら、死んでしまったら、あなたは自分の霊の口座に何も付け加えることができないからです。

あなたが天にたくわえる宝は、今あなたがやっていることです。死んでしまったら、あなたには「ああ、でも主よ。私はそれをすべてあなたにお任せしたいのです」とは言えないのです。

私が持っているものはすべて、主のものであります。しかし、主は私にそれを使わせてくださいます。私がそれを全部使ったら、主のためには何も残りません。

それではいけません。主は、「たくわえなさい」、今利用しなさい、と言われます。「自分の宝を天にたくわえなさい。」その理由は、「あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」

からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るい。もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、〔やれやれ〕、その暗さはどんなでしょう。だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。

(6:22-24)

これはすべて、宝をたくわえることに関連しています。もしもあなたの関心が富にあるなら、もしもそれがあなたの人生を支配してしまっているなら、もしもあなたが自分の持ち物によって支配されているなら、あなたは同時に神の僕となることはできません。

あなたは神にも仕え、富にも仕えることはできません。二人の主人に使われることはできないのです。

あなたはある時点でどちらかをなおざりにし始めます。一方を保持し、他方を憎むこととなります。神にも富にも仕えることはできません。人間はそうしようと試みてきましたが、それはできないのです。

さて、主はそれから、心配することについて私たちに語られます。

心配したりしてはいけません。(6:25)

不安を持ってはいけない、心配してはいけない、ということです。

自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。(6:25)

第一に、

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。

(6:26)

ですから、イエスは私たちにこう言っておられます。「心配してはいけない。鳥を見なさい。彼らは種まきもせず、借り入れもせず、倉に納めることもしません。」

主は、私たちが植えるべきではないとか、私たちが収穫するべきではないとか、働くべきではないと提言されているわけではありません。そのようなことは全く言っておられません。私たちは必要に関して、つまり、私たちの必要が満たされることに関して、完全に受け身になるべきでもありません。

小鳥が口を開けて電柱の上にとまって、虫が飛び込んでくるのを待っているのを見かけることはないでしょう。鳥は動いています。下に降りてきて、地面をつつき、虫を見つけて食べます。

鳥は完全に受け身ではありません。主はここで私たちに完全に受け身になることを教えておられるわけではありません。あなたはただのんびりして、リラックスし、何もしなくていい。神があなたの面倒を見てくださるから。それは聖書的ではありません。

パウロは、働きたくない者は食べるなど言いました(2テサロニケ 3:10)。主は私たちに、働く力と能力を与えてくださっています。私の幼い孫娘が言うように、「神さまは私に頭脳を与えてくれて、私にそれを使ってほしいと思われているの」です。

神は私たちに能力を与えておられ、私たちがそれを使うことを望んでおられます。でも、心配してはいけません。思い悩んではいけません。「ああ、どうしよう。どうやって支払おうか。どうすればいいんだ」と言っははいけません。

これらのことで心配してはいけません。あなたのお父様はあなたにこれらのものが必要であることを知っておられ、あなたのお父様は鳥がきちんと世話されるように取り計らわれるからです。

あなたのお父様が、鳥がきちんと世話されるように取り計らわれるなら、お父様は必ずあなたが世話されるようにも取り計らってください。あなたのお父様なのですから。あなたは、お父様にとって、鳥よりももっと大切な存在なのです。

ですから、あなたのお父様が、必ず鳥が養われるようにされるなら、あなたは、お父様が必ずあなたも養われるよう取り計らってくださいと確信してよいのです。だから、それについて心配してはいけません。

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのち（身長）を少し（1キュビト[約18寸]）でも延ばすことができますか。（6:27）

ああ、私はチビなのがとても心配です。ああ、背が高かったらいいのになあ。あなたがたのうちに、ただそれを心配して、座って願うだけで身長を18インチ（約44cm）伸ばすことのできる人がいるのでしょうか。

無理です。主は、心配することには、現実には何の有用性もないと言っておられるのです。心配には、単に、何の値打ちもないのです。では、なぜ心配するのです。

なぜ着物のことで心配するのですか。（6:28）

ところで、私の妻はここにいますか？

野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。（6:28）

ツム（紡錘）のことはお分かりでしょう。女性たちは、もちろん、自分たちで糸を紡がねばなりませんでした。自分たちで布を作ったんです。イエスは言われました。「野のゆりを見なさい。それらは働きもせず、ツムに向かって座りもしません。」

しかし、（わたしはあなたがたに言います。）栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。（6:29）

巨万の富を持って栄華を窮めたソロモンでさえも、野のゆりほどにも美しく着飾ってはいませんでした。

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。（6:30）

イエスはここで、心配することと信仰をもつことを対比されています。あなたに本当に信仰があれば、あなたは心配することはありません。

心配するということは、あなたに信仰が欠けていることを示すものです。信仰と心配とは、相いれないものです。「信仰の薄い人たち。」

きょうあっても、あすは炉に投げ込まれ、燃やされる野の草さえ、神は美しく装ってくださいます。

神が、ましてあなたがたの面倒をみて、装ってくださらないことがあるのでしょうか。ところで、私は妻のことで冗談を言いましたが、これらのことに関して、妻のケイがとっくの昔にキリストの言われている境地に達していることを、私は神に感謝します。

私は、彼女のことを神に感謝し、彼女が私や教会の女性たちにとって霊的な模範となっていることを感謝しています。彼女は着る物とかその他の物のことについて、過度に気かけないからです。私たちはとても質素に生活しています。そして私は、主がキリスト・イエスにあって私たちに求められる質素な暮らし方について、私と同じ視点を持つ伴侶を私に与えてくださった神に感謝しています。

なのに、私は彼女をからかいました。ただ笑いを取ろうとして彼女を使ったんですが、おそらくそれは正しいことではないでしょう。神よ、お赦してください。申し訳ありません。そうでなければ、妻は私に、「そう。私がこうすると言うのなら、いいでしょう。その通りにしましょう」と言うでしょう。

そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。（6:31-32）

あなたのお父様は、これらのものがあなたに必要であるのご存知です。それらのことで心配してはいけません。あなたのお父様はあなたにそれらのものが必要であるのご存知です。

よって、それは私たちの最大の関心事であるべきではありません。私たちはそれらのものを、人生における何よりも重要な事からして求めるべきではありません。では、私たちは何を求めているべきなのでしょう。

まず第一に求めなさい。(6:33)

異邦人たちはそれらのものを求めます。この世の流行です。「異邦人」という言葉はまた、「異教徒」とも訳されます。異教徒たちは皆、探し求めています。

今日のレストランやグルメ食品のことを考えてください。雑誌はどれも、食べ物や着る物のことを強調しています。異教の世界がこれらのものに持っている関心の高さには驚かされます。

だから、(しかし、あなたがたは) 神の国とその義とをまず第一に求めなさい。(6:33)

優先順位というのは、何と大事なことでしょう。大事なことを第一にすれば、あとは神が面倒をみてくださいます。あなたが神の国とその義とをまず第一に求めれば、

それに加えて、これらのものはすべて与えられます。(6:33)

神がそれらのものの面倒をみてくださいます。あなたはそれらのことについて心配しなくていいのです。あなたは、人生において、何よりもまず神を第一に求めさえすればよいのです。神の国と、その義とを第一に求めれば、神はそれ以外のものすべての面倒をみてくださいます。

さて、私たちが自分たちの生活に目をやって、私たちの時間の過ごし方とか、私たちが洋服を買ったり、食べ物を買ったり、また洋服や食べ物などを買うためのお金を手に入れることに関心を持っているのを見たら、私たちの時間の大半が奪われてしまっていることに気づくでしょう。私たちは、これが流行だから、これがブームだからと、ファッションスタイルや、ラベルの幅や、ネクタイの幅やら、何やらを意識するように、ひっきりなしに広告業界のプレッシャーにさらされているからです。

それで、私たちは洋服が着古される前に、処分してしまいます。それらがもう流行りではないからです。

私たちは、この商業体系全体の被害者となってしまっています。そして食事の支度にも怠惰になって、1ドル25セント払ってパンを一個買います。ちょっと手間をかけようと思えば、原料小麦を1ポンド(約450g)あたり6.5セントで買って、粉をひき、健康に良いパンを一個19セントで作れるんです。でも、それにはちょっと余計に骨を折らなくてははいけません。

ですが、基本的に、これらのことを心配してはなりません。それが主の言われていることです。これを何よりも重要な問題にしてはなりません。これらのものをあなたの人生における優先事項にしてははいけません。

神の国とその義を優先するのです。そうすれば、神はこれらの他のものごとの面倒をみてくださいます。あなたはそれらのことを心配しなくてよいのです。主はあなたにこれらのものが必要であるのをご存知です。

この場合もやはり、イエスが言われたことを思い出してください。「祈る時は、長時間祈らなければならないと思ってはなりません。」神はあなたが願う前に、あなたの必要を知っておられ、主はあなたがこれらのものを必要としているのを知っておられます。

だから、あすのための心配は無用です。(6:34)

私たちの心配のほとんどが明日のことであるのは面白いと思いませんか。私たちの心配は、決まって、今日のことよりも、むしろ明日のことなのです。

私は今日という日に生きて、今ここにいます。そして私は食事をして洋服を着ています。私は今日のことについてはあんまり心配はしませんが、明日はどうしましょう。来週あの請求書が送られて来たら、どうしましょう。私たちの心配が生まれるのは、たいてい未来のことについてです。

でも、主は言われました。

だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。(6:34)

私は、ヤコブが手紙に書いた忠告を思い出します。「**また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。**」(ヤコブ 1:22)

山上の垂訓の学びを終えるにあたって、イエスは、みことばを聞いて実行する人たちのことをたとえて、ほぼ同じことを言われます。

彼らは、家を建てる時にまず深く掘って岩の上に土台を敷いた賢い人になぞられます。対照的に、愚かな人はみことばを聞いてもそれを実行しません。そしてその人は、砂の上に家を建てる人のようです。

ですから、私たちが、私たちのためにイエス・キリストがはっきりと述べられたこの偉大な声明を考察するにつけ、私たちが、ただみことばを聞くだけの者にならないよう、主が助けをくださいますように。「ああ、素晴らしいですね。

全くです。その通りです。確かに、私はこれらのことを心配するべきじゃありません。本当に、私は天に宝をたくわえるべきです。」「そうですね」と私は賛同して言います。「はい、その通りです。全くです。」

でも、私はそうしないのです。私は愚かです。私は砂の上に建てています。私が建てているのは建物の土台より上の部分で、それは嵐になると崩れることとなります。重要なのは、私がみことばを行う者となり、聞くだけの者にならないことです。

今週、私たちが外に出て行くに当たり、山上の垂訓に感心するよりも、むしろ、現実に、山上の垂訓を実践することができるように、神が私たち一人ひとりを助けをくださいますように。これらの原理が私たちの生活において現実となり、私たちがイエス・キリストのこれらのみことばに従うことができますように。私たちが、確かに、御父の子どもとなり、よって、御父がその子どもたちに与えてくださるすべての祝福と喜びと恩を受け取ることができますように。